
とある傭兵と商人の顛末

旗手

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある傭兵と商人の顛末

【Nコード】

N4340Y

【作者名】

旗手

【あらすじ】

自由気ままに新天地を目指した傭兵マーカスを待ち受けていたのは、銃と魔術が混在して相容れない地だった。

そんな地でたくましく生き、野望を胸にひた走る女商人、アンナ。

二人の出会いがもたらす運命は、一国の存亡をも巻きこむ大きな渦となっていく。

傭兵、新天地に立つ

「見えたぞ！港街だ！」

航海が5日目を迎えた早朝。

乗組員の1人が叫んだ。

船酔いに悩まされ、船内で横になっていたマーカスは、おぼつかない足どりで甲板に出た。ぼさぼさの金髪をかきながら、舳先の方を見やる。

しばらく眺めていると、水平線に陸地が現れた。さらに近づくと、陸の斜面に白い建物が並んでいるのがわかり、船着場も見えてきた。たくさんの白い帆が、朝やけの光を浴びて、淡く浮かびあがっている。

「本当だ！」

「間違いない！港街だ！」

「ついに”白の港”、”王国の美しき面”と謳われるハシタアル港についたんだな！」

ほかの乗組員たちも続々と甲板に上がってきた。マーカスは彼らと肩を組み、歓声をあげた。

地獄のような船旅から開放される喜びと、新天地で待ち受ける未来への期待に、マーカスは胸躍る気持ちだった。

船は着場へ近づいていく。

いく隻もの船とすれ違いうち、だんだんと港町特有の喧騒に飲まれていくのがわかる。潮と酒と体臭の入り混じったひどい臭いが鼻をつき、マーカスはおもわず顔をしかめた。

船着場には多くの船が停留しており、たくさんの人々が入り乱れ、様々な国の言語が飛び交っていた。

船が棧橋に着くと、すぐに荷下ろしが始まった。

「おい！ その荷は丁重に運べ！ バカ野郎！」

フラついた足取りで木箱を運ぶ船員に、船長格の男が激を飛ばす。
ずんぐりした手脚をオーバーに動かして指示しているのは、赤ら顔で禿頭の男だ。

「バルハリク船長」

マーカスがふらつく船員を手伝ってやりながら、船長格の男に声をかける。

「この木箱の中身はいったいなんなんだ？」

「秘密だ！ 買い手からの強い要望でな！ 開けたら殺す！」

マーカスはこの木箱の中身が気になっていた。

自分が護送を請け負うことになっている品だからだ。

買い手は内陸の商人で、これを取引相手に届けるまでの間、品物と商人の身の安全を確保するのが、この地ブリガン王国での、傭兵としての最初の仕事だった。

マーカスを商人に紹介するのは、いま目の前で怒鳴り散らしている船長のバルハリクだ。

二人は親子も同然の関係だった。

マーカスの故郷はリイズ公国という。

いまいるブリガン王国よりずっと小さいが、資源が豊富で力のある国だった。

バルハリクの夫人が、その内陸地域で孤児院を営んでおり、マーカスは15までそこで育てられた。

まだ髪がふさふさだった頃のバルハリクが、海から帰ってくるたび、少年のマーカスに馬術、剣術、賭け事など、彼が男の嗜みと考えるものを教え込んだ。

もっとも、育った環境のせいか、マーカスはバルハリクの望むよう

な船乗りにはならなかった。代わりに傭兵としての道を選んだのだ
った。

それでも、バルハリクは彼のことを気にかけ、こうして渡航の世話
や仕事の斡旋までしてやっていた。

リーズ公国はいま国境地域で紛争が起きている。

マーカスはギルドに所属する傭兵として軍役を課せられ、何ヶ月も
拘束されるのを嫌い、リーズから逃げてきたのだった。

戦災で親をなくして孤児院で育ち、愛国心など欠片も持たない彼は、
ここブリガン王国で新しい生活を始めることに決めたのだ。

（そのためには、今回の仕事を滞りなくこなさなくちゃな）

マーカスは決意を新たにし、表情を引き締めた。

木箱は3ｆｔ四方のものが全部で4つ。それらが一台の荷車に載せ
られた。

船に積んできたなかで、今日中に取引が予定されているのはこの荷
だけだった。

バルハリクは船員たちに荷下ろしをサボらないよう釘を刺してから、
取引場所である倉庫へこの荷を運ぶため、マーカスに荷車を引かせ、
自分は後ろからそれを押す。

「いくぞマーカス」

「おう、おやっさん」

2人は人混みへ分け入った。

港、美しきその面差し

ハシタアルの建物は石灰岩を利用した建築で、通りの両側に純白の列を成していた。その列からせり出して露店が並ぶ。活気付いた声が飛び交う中を行く人々は、容貌も身分も様々だった。シルクのレースをなびかせる浅黒い肌の麗人や、多くの従者を引き連れて胸を反らせて歩くブリガンの男爵、それをすごすごよけて通るボロ服の船乗りたち。

マーカスたちの荷車はそれらの雑踏の間をうまく縫うように進んでいた。

さすが”白の港”、”ブリガンの美しき面”おもてとうたわれるだけあるなど、マーカスは見回しながら思った。

ハシタアルはブリガン王国を代表する沿岸都市だ。外海から訪れる人や交易品を迎え入れ、この国の特産品である毛皮や羊毛、鉱石を輸出する。まさに顔の役割をなす都市だった。

だが、もともとハシタアルは、ずっと昔に外海から来た海賊たちが、ブリガン王国の領地を侵略するために築いた橋頭堡に起源をもつ。

この海賊たちの子孫は領土が取り返されてからも残り、それがブリガン王国における商人たち、彼らが運営する商会という組織の始まりになったのだ。

バルハリクは、自分もそういった者たちの子孫なのだとよくマーカスに話していた。彼はブリガン王国の出身だった。この荷を売ることになっている商人も、マーカスと同じリイズの出身だが、商会に

属するから立派なブリガン商人の子孫なのだと、バルハリクは船上で話していた。

バルハリクは故郷や血縁からくるつながりにこだわる男だった。だからこそマーカスのような、本来なら赤の他人である孤児に愛情を注げるのだろう。

マーカス自身は親に捨てられたという気持ちが強く、こういう情はそれほど育たなかったが、考え方自体は好きだったし、バルハリクのことをおやっさんと呼んで慕っていた。

しかし、そういうこだわりはときに困った事態をもたらすこともあるのだ。

船乗りと銃兵と傭兵の関係(前書き)

貨幣

cp: copper peace (銅貨)

sp: silver peace (銀貨)

gp: gold peace (金貨)

価値

100cp || 10sp || 1gp

でお送りします。

船乗りと銃兵と傭兵の関係

なにやら猪のそのような荒い息づかいが聞こえ、マーカスは振り返った。

荷車を押しているバルハリクが、胡乱な目つきで一点を睨んでいた。

彼の視線の先には、三人組の兵士が歩いていた。見たところ銃兵のようだった。

鎖帷子の上に青い上衣を着ており、胸には紋章があらわれていた。革紐のついた金属の筒をたすき掛けに背負っており、マーカスはそれが銃という武器だと検討をつけた。聞き知った通りの形状だったからだ。

「野蛮な科学院の下っ端ども……！　ハシタアルの、いやブリガンの美を穢すやつめら……！」

バルハリクは彼らを睨みつけたまま、ブツブツと罵りの言葉を吐いていた。

「よしなよ、おやつさん。いちいち突っかかってたら、命が幾つあっても足りないぜ」

銃兵は科学院という組織が運営する兵团だ。バルハリクは、彼ら科学院のせいで故郷が変えられてしまうと考えていた。

彼らは魔術に代わる技術として、科学という概念を提唱し、その普及を目的としている組織だ。たしかに彼らは、この国に革新的な変化をもたらしていた。

とくに革新的なのが、銃という兵器と火薬の開発だ。

火薬は、火の勢いを何倍にも膨張させる薬で、修行や訓練を受けなくとも、火の魔術より強力な爆発を生み出せる。科学院独自の技術で、その精製法は門外不出だった。

銃の威力に魅入られた都市の支配者たちは、科学院を積極的に領地へ招き入れた。科学院の本拠は王都ケストナーにあるが、ここ数年で、国中の都市に支部が設立されたらしい。

確かに、その伸長ぶりには門外漢のマーカスも得体のしれない不気味さを感じていた。

そうこうしているうちに待ち合わせの場所についたらしく、バルハリクは我にかえって一棟の倉庫を指した。銃兵たちも横道に折れていなくなり、マーカスはホッとした。

「大丈夫だ。いきなりぶん殴ったりするわけじゃねえんだから。まだそれくらいの分別はあらあ」

「まだってのが気になるけどなあ……。しかしまあ、おやっさんの故郷に対する愛情は嫌いじゃないぜ。おかげで、俺はこっちでも仕事にありつける。感謝してるよ」

「都合のいいことばかり言いやがる。仕事の世話をしてやんのは、おまえの傭兵としての腕を買ってるからさ。まあ、おまえは船乗りには向かんようだがな」

マーカスも、自分には傭兵のほうが向いていると思っていた。なにしろ賃金の安い仕事が嫌いだった。

バルハリクのように自分の船を持っていればいざ知らず、普通は船乗りの仕事など大した稼ぎにはならない。一日舟で働いて、せいぜい1s pが賃金の相場だ。今回の船旅は5日だから5s pだ。仮に一ヶ月船の上で働いて、稼げるのは30s p。これでは一月分の食費を賄うのがやっとの金額だ。船に住みこみで働くか、副業でも持たない限り、人並の暮らしは望めない。

その点、傭兵の仕事は内容も依頼主の素性も様々で、賃金の相場は複雑だが、さいわいこの国の傭兵ギルドは一日の最低賃金が2g pというのが法令で定められていた。それはリーズの傭兵ギルドと同程度の相場で、マーカスには十分満足できる金額だった。

女商人、アンナ

どうやら、倉庫には相手より先についたようだった。待つ間に、マーカスは革の胸当てを着けて、腰に剣を差し、慣れた傭兵の格好に装いをなおした。

「おい、時間があるかもしれんから髪も切ってきたらどうだ？」

隣に立っていたバルハリクはマーカスのボサボサの金髪を見上げて顔をしかめた。

「このあたりの床屋は高いのさ。ほかの船乗りから聞いた話だと、一回の散髪で4c pはとるんだよ。いま俺の全財産が5s pだし、あまり出費したくない」

「おいそりゃ、俺が船員の報酬として払った額だろうに！ 向こうの仲間から送別にもらったっていう10s pはどうしたんだ？」

「いや、あんまり舟が揺れるもんだからさ、うっかり海に落としたちまったんだよ。船旅のあいだじゅう、ずっと海が大しけだったろう？」

「何言ってやがる。どうせ船員たちとの博打遊びにつき込んだんだろう、このろくでなしめ」

凶星を突かれたマーカスは頭を掻いた。

「おやっさんこそ、整えないでいいのかい。その頭は」

バルハリクはおもわず丸い禿頭を両手で押さえる。顔を赤くしてマーカスをにらんだ。

彼が何か言おうと口を開きかけたとき、パカ、パカという蹄の音が近づいてきたので、二人は入口のほうを見た。

倉庫の入り口に獣が二頭現れた。馬にも似ているが、ロバのような長い耳をしている。二頭ならんで馬車を曳いていた。

「おお、アンナ！」

バルハリクが両手を広げてうれしそうに叫んだ。

二頭の獣が曳く馬車から降り立ったのは、一人の女だった。

赤いローブですっぽりと身体を覆っていたが、後ろに束ねた黒髪と顔つきで性別がわかった。

アンナと呼ばれたその女性は、油断なく光る緑の瞳でバルハリクを、次にマーカスを見た。

そして、ふいに目を細めた。つかつかと歩み寄ってくる。マーカスは思わずニ、三步後ずさった。アンナは6フィート以上あるマーカスの体軀をじろじろと上から下からねめまわす。ふんと鼻を鳴らした。

「こいつが俺の言ってたマーカスって男だ。見てくれはなんだが、腕は確かだぜ。俺が保証する」

バルハリクが紹介した。

マーカスは彼女のあからさまな態度にむっとした。

（この女、俺の値を下げにかかってやがる）

商人によくある手口だった。難癖をつけて雇う相手の評価を落として、自分の払う報酬額をすこしでも減らそうという魂胆なのだ。

（冗談じゃない。最初の仕事から安売りしていたら、今後の儲けにも響くじゃないか）

マーカスは軽く息を吸い込むと、胸のあたりにあるアンナの顔を見下ろしながら、

「よろしくたのんます。リイズ国で10年、傭兵稼業をやってました。内戦のときは前線部隊として参加したこともあります。そこらのゴロツキよりは役に立ってみせますよ」

声を張って自己紹介してみせた。

「リイズ国だって？」

ところが、アンナはまた鼻を鳴らした。

「あんな古い国の内紛なんて、どうせ前時代の戦いくさだろう」

「な!？」

交渉、成立

2人のやりとりには、思わずバルハリクの顔がくもる。

「おい、アンナ……」

「前時代ってのは、どういうことだ……?」

マーカスは眉をひくつかせながら聞いた。

「どういふことって、銃を使わない戦ってことさ」

「たしかに、銃を使う戦に参加したことはない。だが、銃っていう武器のことなら、俺だって知ってる」

「知ってるだけで、じっさいに戦えるものかね」

見かねたバルハリクが割って入った。

「おいおいアンナ。銃の扱いにも慣れてなきゃダメだしたら、雇う条件としては酷じゃないか? あんな高価な武器を持っているやつなんぞ、そこらじゅうにいるわけじゃないだろうに」

アンナは肩をすくめてみせた。

「ここ二、三年で、この国の事情は大きく変わったんだよ。あつという間に銃が市井まで普及して、いまじゃ、あたしのようなしがない商人だって銃を手に入れられるのが現状さ。ブリガンの国王が各都市を束ねるのに、科学院を利用していう噂がそもその発端でね。彼らの技術は魅力的だが、所詮は王家の息がかかった組織だからね。それに対抗する為に、各地で銃や火薬の密造、密売が横行するようになった。科学院に頼らない武力を欲しがったんだろうよ。誰がそうしているかは、商人である私からは言えないがね。そういう経緯があつて、あつという間に裏の経路で銃、火薬の市場が充実してきたってわけだ」

そういつてアンナは、ローブの袖に手を突っ込んで、にぶく黒い光を放つ筒状のものを取りだした。銃だ。隠し持って携帯するのに便利な短身のものだ。

バルハリクはしばらくの間、彼女の持つ銃をじっと睨みつけていた

が、しぶい顔で腕を組み、口を開く。

「おまえの言い分は、よくわかったよ。そういうことなら、人材を斡旋した俺にも責任がある——俺の紹介料を半分に減らすかわりに、こいつの報酬は減らさないってことでどうだ？」

「おやっさん……！」

マーカスは驚いてバルハリクを見た。

アンナは何もかも見透かしたような緑の瞳で、目の前の禿頭の男を見据えた。

「なんでそこまでするんだい」

バルハリクもアンナをまっすぐに見かえす。踏ん反り返って、への字口をつくった。

「俺がマーカスの腕を買ってるからだ」

アンナは肩をすくめると、銃をしまいながら言った。

「いいよ……そこまで言うんなら、おやっさんの紹介料が半分で1 g p、こいつの報酬が3分の2ってことで、4 g p。これで手を打とうじゃないか」

マーカスは彼女を睨みつけていたが、バルハリクはゆっくりとうなずいた。

女商人の出自

アンナが荷の中身を確認するというので、ふたりは倉庫の外に出た。扉の前に並んで立ち、待つことにした。

バルハリクはしばらく険しい顔で黙り込んでいたが、やがて口を開いた。

「……すまん。約束より報酬が減っちゃった」

「謝らないでくれよ。三分の二なら4 g pだ。相場の二倍だ。十分さ」

マーカスは苦笑した。彼にも察しがついていた。仕事をバカにされたからと言って、腹が立ってムキになった自分がバカなのだ。

銃と火薬が彼女のいうほど市井に流通しているのなら、事情に疎いよそ者はハナから雇えない。アンナが銃を持っていることが特殊だと考えるべきだ。彼女はわざわざ用意してきたのだろう。

親しい取り引き相手の紹介は断れないので、策をしかけて都合よく報酬を値切った、といったところだ。それで交渉の場にいる全員の顔は立ち、仕事上での関係も保てる。

しかし、自分の故郷や知己のものを貶めてまで金の得を取ろうとしたり、銃というお上の兵器を平然と袖の下から取り出してみせたり、アンナという商人はただ者ではない。マーカスは宙を睨みながら思った。

マーカスが思索に唸る傍で、かたわらバルハリクは、おもむろに袋をまさぐ

りはじめた。金貨を2枚取りだし、マーカスに突き出した。

「ほら、値切られた分の2g pだ。これでもとの額になるだろう」
「なんだそりゃ、なんでおやっさんが払うんだ。受け取れねえよ」
「いいからとっとけ！ このバルハリク様からの餞別だ！」

強引に押しつけられ、つき合いの長いマーカスでも断り切れなかった。

「2g p程度じゃ新しい鎧も買えないだろうが、酒でも博打でもなんでも好きに使え。そのかわり、もしものことがないように、アナのことをくれぐれも護ってやってくれよ」

マーカスは訝しげな表情を浮かべた。

「えげつない値切られ方をした割に、やけにあの女に義理立てするじゃねえか。おやっさんなんか紹介料が半分だぞ」

「……俺にとっちゃ、娘みたいなもんだからな」

「娘だあ？」

「あいつも”人魚の家”で育ったんだ」

「なんだと!？」

マーカスは心底驚いた。

”人魚の家”はマーカスがいた孤児院の名だ。アナの顔は知らないから、マーカスが抜けてから入ったのだろう。

「あの子は頭のいいしっかり者だが、なんだかずるけたところもあってな。商人に向いてると思って、商会に入れるように世話してやったのさ。今じゃ、あの通り立派にやってるよ」

「へえ……」

マーカスは妙に納得してしまった。バルハリクにとっては、アナが娘で自分は息子。兄妹のように思っているに違いない。彼のことだから、お互い助け合えるような関係を計らおうと思ったのだろう。

アナもそういうおせっかいを見抜いて、足元を見たのだ。なるほ

ど、やはりしたたかな女というわけだ。

だが、マークスはおやっさんのそういうところが嫌いになれなかった。アンナのやっていることも否定するつもりはなかったが。

港街、発つ

荷の確認が終わったようで、倉庫の扉が開く。アンナは二人を倉庫に招き入れた。

荷車に積まれていた木箱は、アンナが用意した馬車に載せ変えてあった。その車輪には螺旋状に折り曲げられた針金に取り付けられ、これが伸縮することで振動を和らげる仕組みになっていた。マークスはリイズ国にいたときにも、こんな仕掛けのほどこされた馬車を見たことがあった。

「たしかに確認させてもらったよ。どれもいい品だね」

「あたぼうよ」

バルハリクはアンナから金の入った袋を受けとった。

「これで全部の交渉は完了だね。さて——マークス、早速で悪いが、発つ準備をして欲しい。今日中にはハシタアルが出るよ」

マークスは肩をすくめる。

「構いませんよ。依頼主様の言う通りにいたしますぜ」

バルハリクとはここで別れることになった。彼は二人に陽気な笑顔で別れを告げると、荷車を曳きながらゆっくり去っていった。

二人はバルハリクのうしろ姿が曲がり角へ消えるのを見届けると、馬車に乗りこんだ。

「悪いけど、あんたは荷台に乗っておくれ」

マークスは「へいへい」と無愛想に返事をする、荷台の空いたスペースに腰かけた。

アンナは御者席に座ると鞭を振るう。

馬車は倉庫の密集する地区から大通りへ出て、城門へ向かう。車輪の仕掛けのおかげで、馬車の乗り心地は快適だった。船酔いが抜けきっていないマーカスにとってはありがたかった。

門前にたどり着くと、昼間なので門は開かれており、その前に銃兵たちが横並びに立っていた。

アンナは馬車を降りると、門脇の詰め所に向かった。

荷が怪しいだけに、ハシタアルを出ないうちに旅が終わってしまうのではとマーカスは心配したが、そんなこともないようだった。

馬車に乗って待っていたマーカスは、詰め所から和気あいあいと話す声を聞いた。

詰め所から出てきたアンナは、銃兵と二言、三言ことばを交わしてから、馬車に乗りこんだ。並んで立っていた銃兵たちが素早く脇へのき、馬車は走り出して、ハシタアル門をくぐった。

街の外にでた瞬間、マーカスは頬に風が当たるのを感じた。一気に広がった景色を、思わず見渡す。

草原が風になびき、深緑のさざ波を立てていた。その緑の海を彼方まで分つように、馬車の走る街道が続いている。

「なあ、アンナさんよ」

「アンナでいい」

「んじゃ、アンナ。確か、目的地は王都のケストナーとかいう都市

だったよな」

「そうさ」

「何日くらいでつくんだい？」

「2日くらいだね。途中、山脈を超える道のりだよ。今日中に麓の村に着かなきゃならない。そこで宿を取る予定だ」

マーカスは西の空をみた。巨大な半円形の夕陽が、波立つ草原に沈んでいく最中だ。正面を向けば、少しずつではあるが、峻険な山々の陵郭が地平線から顔を出しつつあった。

「間に合うのか」

「こいつらはロバと馬の合いの子の羅馬って動物だけど、馬ほど速くないがそれなりに速く長く走れる。今日中には着くさ！」

アンナは語尾を強めながら、ならんだ羅馬の尻にムチを入れる。二頭はいななき、加速した。

白狼、古きもの

馬車の進むスピードは上がったが、なかなか山脈の麓へはつかなかった。その間にみるみる日は落ち、東の空は不吉な群青色に染まっていた。

マーカスはボーッと沈みゆく夕陽を見送りながら、だるそうに言った。

「……間に合うのかい？ アンナ」

彼女は振り返り、肩越しにマーカスを見る。

「……思ったより荷物が重い。いい品だって証拠だけど、裏目に出たね。日没までに間に合わないね、こりゃあ。運が悪いと、厄介な目に遭うよ」

「どういことだ」

マーカスもアンナを見る。二人は顔を見合わせた。

沈黙が訪れ、馬車を曳くラバの蹄音と息遣いが大きくなった。

それに混じって、腹の底が冷えるような咆哮が風に乗って響き渡った。

マーカスはぎょっとして周囲を見渡す。

「マーカス、あんたは荷をたのむよ！」

アンナは今までより激しくムチを振った。ムチの乾いた音と羅馬のいななきがやかましい。そこに先よりも大きい咆哮が混じる。

マーカスはどの方角から咆哮が聞こえるのか突き止めた。東からだ。

薄暗い方に向かって目を凝らす。群青に染まった空の下。小高い丘から、白い影がいくつも現れ出ていた。それらの影は同時に斜面を下り、こちらへ近づいてきた。

「白狼か……」

目を凝らしたマーカスはその正体を見極めた。

「あのクソ忌々しい獣どもを知ってるのか。あいつらはただの狼じゃないよ」

「ああ、リーズにいた頃、一度だけ出くわしたことがある。霧深い、不吉な荒野でね。あれは忘れられない夜さ……」

白狼は神話時代にこの世界へやってきた、狼とは全く別の動物だ。火を恐れず、人を食い、ためらわず共食いをする。全く自然の摂理に反し、数は少ないが、旅人からは恐れられ、忌み嫌われていた。旅の護衛を仕事にする傭兵なら、無縁ではいられない存在だった。

マーカスはゆっくりと腰を上げた。

「こいつは、腕の見せどころってことだな」

宵闇に支配された東の方角、馬車の右手から、白狼の群れが迫ってくる。ざっと数えて20頭ほど。群れ自体が生きてうごめく白い塊になり、またたく間に、一頭一頭の残忍に光る目が確認できるくらいに距離が縮まっていた。

マーカスも瞳をしずかに光らせ、剣を抜く。

そのうち一頭が、^{こけら}？のように塊から抜け出て、距離を詰めてきた。

マーカスは腰を落とし、右下段に剣をかまえた。

白狼はみごとな跳躍で、馬車の荷台で剣をかまえるマーカスに踊りかかった。

マーカスは左上段へ振り上げる軌道で、その白狼を叩き斬った。

胸部と下顎を裂かれた白狼は一太刀で絶命した。地面に落ちて勢いよく弾み、転がる。三頭の白狼が、血塗られた毛皮のかたまりと化した仲間に群がり、その肉を貪りはじめた。

残りの16頭は塊を崩さずに、馬車を追いかけてくる。

マーカスは背負い袋から麻布を引っ張りだし、刃についた血と身体についた返り血を拭った。内心で舌打ちした。

――やはり、数が多すぎるか。

白狼の共食いの習性を利用して足止めを考えた。だが一頭に対して関心を示すのがあれだけの頭数だと、少なくとも四頭は斬り殺さなくてはいいけない。

斬れば斬るほど、集中力も剣の切れ味も落ちる。この状況を無事に切り抜けられるだろうか。マーカスの胸に不安がよぎった。

「マーカス、ちょっといいかい」

呼ばれて振り向く。アンナは肩ごしに何かを投げてよこした。マーカスはあわててそれを受けとった。手にとったそれを見る。

「これは……」

「爆弾さ」

「バクダン……?」

「銃と同じ、火薬を利用した武器さ。一回きりしか使えないが、固

まったやつらをまとめて仕留めるにはいいよ」

それは片手で握れる大きさの、麻布でくるまれた球体だった。そこから一本の紐が伸びている。

その紐を伝って火花が、球体へ向かっていく最中だった。

「おい、これもう火が点いてるぞ！」

「火が玉までいったら爆発する」

「はあ!？」

「タイミングを合わせて投げな」

マーカスは自分の握っている爆弾と白狼の群れを交互に見た。

その間にも火は紐を伝う。球体にあと少しのところまで達していた。

マーカスはあわてて白狼の群れに向かって爆弾を投げた。爆弾は白い塊の中心に落ちた。

次の瞬間、音が破裂した。一瞬で土煙が上がり、衝撃波がマーカスの金髪を撫でつける。巻き込まれた五、六頭の白狼が吹き飛んだ。たじろいで身を低めたマーカスの頭上を、獣の身体が弧を描きながら飛んでいった。そのままべしゃりと地面に落ちる。

マーカスは引きつった表情で遠ざかる土煙を見送る。残りの白狼たちは仲間の死体に群がりはじめていた。もはや馬車を追ってくる獣は一頭もいなかった。

「いやったー！」

アンナは腕を振りまわして叫んだ。

「科学万歳！　ざまあ見ろ！　古きものは、どんどん滅ぼされていくがいいさ！」

マーカスは爆発の衝撃でまだ顔をこわばらせつつ、彼女の言葉に胸が痛むのを感じた。

（古きもの、か……）

麓の村、商館

白狼に追われたせいで、ラバたちは死に物狂いで走ったようだ。なかなか見えなかった山脈の麓が地平線にあらわれ、村とおもわれる建物の群れが見えはじめた。

二人は安堵の息を漏らした。

近づくうちに、村を囲う外壁と門が見えてきた。木でできた外壁と門だった。

その前で立番している衛兵たちがこちらに気づいた。

血を浴びた馬車の様子を見て、彼らの顔つきが変わる。緊張した雰囲気になるのをマーカスは感じた。馬車はかまわず進み、門の前で停まった。

馬車を囲む兵たちはみな、険しい表情を浮かべている。最年配とおもわれる一人が、返り血を浴びて鎧の汚れているマーカスを、険しい表情で見上げた。

「何があった」

「白狼に襲われたんだ」

マーカスは真実を答えた。

彼らは何やら小声で話しはじめた。マーカスの胸に不安がよぎる。

アンナは自分の背負い袋をまさぐりはじめた。丸めた羊皮紙を取り出すと、馬車から降り、最年長の男にわたした。彼は訝しげな顔で

それを受け取ると、広げて読みはじめる。

やがて文字を追っていた目をきゅっと細め、眉間にしわを寄せた。

「商会の差し金か……」

衛兵はアンナを睨めつける。彼女は意に介さない軽い口調で返す。

「わかったら、早く通しておくれ」

年長の衛兵はしぶしぶといった様子でほかの者に指示を出す。

やがて、昇降式の扉がゆっくりと上がりはじめた。

門をくぐったさきに広がる景色は、まさに農村だった。

馬車は麦畑のすき間に走る細い道を行く。

風とともに、さーっと麦の穂がさざ波を立てた。やわらかい光を灯した家々が夕闇に浮かびあがっている。つい今朝まで海の旅をしていたマーカスには、素朴な農村の風景がとても懐かしかった。

正面遠くに、ひときわ光を放つ建物が見える。あれは家ではない。館だった。

馬車の走る道は、まっすぐ館の門前まで続いていた。近づくにつれ、マーカスはその門がまえの立派さに気づいた。鉄製の両開きの門だ。その脇に立つ衛兵は、村の外壁にいたものより上等な兵服を着ている。館をぐるりと囲んでいるのは、漆喰で塗りがためられた白い塀だった。とても豪華で堅牢だ。

「すげえな。村を囲ってる塀より数段は立派だ。これが商館なのか」
「この商館は売物の保存、中継が役割で、市も主催しないし、小さ

いほうだよ。本部の商館は山脈の向こうにあるが、比べものにならない大きさだよ」

マーカスは先ほどの衛兵たちの態度に合点がいった。これだけ設備の差を見せつけられれば、不条理から反感を抱きたくもなるだろう。商会は力のある組織なのだ。

商館の衛兵たちは馬車に乗っている人物に気づくと、笑顔で手を振る。

アンナが手を振りかえした。門前までくると、男たちと親しげに会話をはじめた。

マーカスは端からそれを眺め、こいつは慕われているのだと思った。仲間と話す彼女の横顔には、おだやかな笑みが浮かんでいた。

ひとしきり話が終わったあと、アンナはマーカスを男たちに紹介した。

「こいつは護衛のマーカスだ。知り合いの船乗りからの紹介でさ。リイズって国から来た」

男たちは血だらけのマーカスをみて、にやにやと笑った。

「あんたがそうかーなかなかの男前じゃないか」

「よかったなアンナ。お楽しそうな旅だよ」

アンナは肩をすくめた。

「なあに、これからもっと楽しくなるだろうさ」

マーカスもつられて笑いあった。

馬車が敷地内に入ると、数人の小間使いが納屋へ先導する。正面か

ら見たときはわからなかったが、商館の敷地内には複数の建物があった。

「あんたは先に降りていいよ」

アンナはマーカスに振り返って、棟のひとつを指した。

「あれが宿舎だ。あそこに行けば、従者が泊まる部屋に案内してくれる」

マーカスは言われたとおり、荷台から降りると館へ向かった。

アンナは馬車を納屋に入れ、荷の保管とラバたちの世話と馬車についた血の掃除を頼んだ。馬車から降りて伸びをしていると、

「アンナさん」

アンナに専門でついている従者の女が、焦った様子で駆けてきた。主人の帰りを知って飛んできたようだ。

「どうしたんだい」

「館長がお呼びですよ」

「館長が？」

「ええ、何の用かはおっしゃいませんですが。執務室で待っていると伝えてくれと」

「これから、すぐにかい？」

「なるべく急ぐようにと」

アンナの胸に一抹の不安がよぎった。

館長は商館における最高位の役職で、総監督の任を負う。務めているのは女性の商人で、アンナと仲が良かった。だが、いままで彼女に執務室まで直接呼び出されたことはなかった。良い用事とは思えない。アンナにはその心当たりがあった。

「わかった。着替えたらすぐいってみるよ」

平静をよそおって返すと、アンナは館へ向けて歩きだした。その足取りはなんとなく重々しかった。

マーカスが宿舎の扉を開くと、何人かの従者が迎えに現れた。彼らは血で汚れたマーカスの格好を見ても動じる様子はなかった。部屋に案内され、半ば剥ぎ取られるように服と革鎧を脱がされた。従者たちは、着替えを持ってくるまで部屋で待つようにと、事務的な口調で言いのこして去って行った。

服も着ないで外を歩けるか。マーカスは内心でぼやきながら、どっかと椅子にかけた。

見まわせば、ベッドと椅子と炉があるだけの簡素な部屋だった。中央に炉が置かれ、部屋全体をぼんやりと照らしている。隅にはかろうじて居場所を見つけた闇がうずくまっていた。

マーカスは椅子に座ったまま、隅の闇をぼんやりと見つめる。白狼の白い毛皮が、真っ赤な返り血が、残像となって闇にチカチカと踊った。

ため息をつく。身体は充分に疲れているのに、久々に剣を振りまわしたせいで興奮が抜けず、眠気がこない。

……こんなときは酒を飲むに限る。そして、ダイスを転がし……。想像した途端、ダイスの転がる小気味よい音が耳の奥に響いた気がした。

「よし！」

マーカスは決然とした表情で、椅子から立ち上がった。

酒場、墮落への誘い

マーカスは商館の敷地から出て、村の通りを歩いていた。替えの服を持ってきた従者に酒場の場所を聞きだし、向かっているところだった。

いま着ているのは青いローブ一枚で、夜風がひんやりと気持ちよかった。胸部には商館のシンボルである紋章が刺繍されている。盾形の枠に樽、麦穂、銃と三つのモチーフが収まっている。

服に関しては、身元をはっきりさせる意図もあるのだろうが、マーカスはなんとも言えない気分だった。商館があることを除けば普通の農村なので、夜の道には人通りが少なく、この珍妙な服装を多くの目にさらさずに済んでいるのは幸いだった。

前方に古びた木造の建物が見えてきた。二階建てで、樽のモチーフの看板が掲げられている。間違いなく酒場だ。窓にはぼんやりと明かりが灯っている。マーカスは扉に手をかけてゆっくりと開いた。

「よう、いらっしゃい」

店主の男が愛想良く対応する。

酒場の中は閑散としていた。客たちはこちらを一瞥し、興味なさそうに視線をそらした。カウンター席と、4席分の丸い卓が5つ。今は2つの卓が埋まっていた。

「ビールを一杯たのむよ。旦那」

マーカスは注文しながらカウンター席についた。

「あんた、見かけない顔だね」

店主はビールの入ったジョッキを置きながら気さくにたずねた。

「山向こうから来たのかい？」

「いや、これから行くところさ。護衛の仕事でね」

「そうなのかい。まあ、ゆっくりしててくれよ。ここは商會が運営してる酒場だからね。関係者なら大歓迎さ」

マーカスは看板に描かれていた樽のマークを思い出した。言われてみれば、この服の紋章にあしらわれた樽のモチーフと似ていた。酒樽を意味しているらしい。この珍妙な服にも、思わぬ効果があったようだ。

「なるほど、じゃ、肴も一つ頼むよ」

「茹でたジャガイモにチーズをかけたやつがうちの人気メニューだよ」

「いいね。そいつをくれ」

店主がジャガイモを茹でている間、マーカスは改めて店内を見まわす。

卓についた客たちは酒をあおってはいたが、実に静かだった。静かすぎるほどだ。これは、今夜ここにいる客が少ないからだけではない。酒場の風景など、どこも似たようなものだ。ここもそうだが、あるものが欠けているのだ。

「……」

マーカスは口を引き結び、2つの卓のうち、どちらへ加わるか品定めする。やがて、にやりと笑った。ビールを一息で飲み干すと席を立ち、定めた卓へ向かう。

「よう」

声をかけられ、卓にへばりついた四人の男たちは、辛気臭い顔を上げた。

「俺はマーカスってものだ。護衛の仕事があつて、この村に立ち寄ったんだが、暇つぶしにつきあってくれないか」

「失せな」

あからさまに無愛想な男たちの態度を無視して、マーカスは腰袋から何かを取りだし、卓上に置いた。

3つのダイスだった。

男たちは顔を見合わせた。一人が飽きたように言う。

「あんた、商会に雇われてるようだが何も知らないんだな」
別の男が引き継ぐ。

「この酒場じゃ、賭け事は禁止になったんだよ」
ほう、とマーカスは残念そうな様子もない。

「誰も賭けごとをやるうとは言っていない。ちよっとした遊戯をやる
ないか」

「なんだと？」

マーカスは袋からさらに何かを取り出した。小さな木彫りの置物だ。
それも卓上に加える。男たちは精巧な木彫りにおもわず魅入った。
造形からして竜がモチーフになっているようだった。

「この竜、目が3つあるだろ」

確かに、モチーフの竜は目と目の間に縦の裂け目がはしり、大きな
目玉のようなものが覗いていた。男たちはその不気味さに、おもわ
ず身震いした。

「“三つ目のマリス竜”だ。その3つの目には、過去、現在、未来
と時間の流れを見る力がある。俺の故国じゃ運命や歴史を司るとさ
れる竜神さんだ」

男たちはいぶかしげな顔をしながらも、素直に祈りのしぐさを見せ
た。

「その神竜さまの偶像を使って、いったいどんな罰当たりをやらか
そうってんだ」

「この木彫を賭けて、ダイス勝負をしようじゃないか。皆さん」

男たちはきょとんとしてから、首を傾げあった。

マーカスは軽く咳ばらいして、遊戯の説明をはじめた。

遊戯の名前は渦潮という。船乗りたちの間ではわりと有名で、？船上での賭博は禁止する？という掟をかいぐる為に生まれたと言われる。

まず、金銭の代わりになる品を用意する。これは一般的にマリス竜をモチーフにしたものが用いられる。この竜神が海に住むとされ、しばしば渦潮や荒波を起こして船を沈め、金銀財宝を奪っていくという言い伝えからだ。この遊戯の渦潮という名称もそこからきている。

テーブルを囲んだプレイヤーたちはダイスを左回りの順で振っている。一周してダイスの目が一番高い者を決める。高い目の者が複数いる場合、さらに目を競い、一人に絞る。そして選ばれたものの手にいったん竜がわたる。それをほかのプレイヤーが割り勘で買い戻し、卓の中央に竜がもどれば、またゲームが再開される。

そういう名目で金銭のやりとりが行われるのだ。

マリス竜の値段は遊ぶ人数によって変わる。参加者が四人なら3c p、五人なら4c pといった具合に、人数に応じて割りきれるような値段を設定する。

説明を聞いた男たちは、いたく興味をそそられたようだった。

「なるほど、それなら伝承にそった遊戯だという言い訳が立つな」

「毎順、かならず卓のうちで一人が勝つなら、ずっとやってりや損をとりもどせるわけだ」

マーカスはぽんと手を叩いた。

「さて、参加者は俺をくわえて五人になるわけだ。値段は4s pで

始めたいが、みなさん、金の準備はいかがかな
男たちは意気揚々とうなずいた。

女商人、暴かれた異心

アンナは扉の前に立っていた。この向こうが館長のいる執務室になっている。そつとノックをした。乾いた音がしんと冷えた廊下に響く。

「入りな」

応じる声。アンナは扉を開ける。

室内は暖炉の火が燃えて暖かい。本や羊皮紙がいたるところに積み上げられ、暖炉の火に合わせてその影が躍っている。それらに囲まれるように机があり、女が書き物をしていた。羊皮紙に羽根ペンを滑らせながら、眼鏡ごしにちらりとアンナを見た。

「座るといい」

机の正面におかれた椅子をすすめられ、アンナはそれに着いた。両手を膝のうえに置いて姿勢を正し、じっと待つ。

館長はやがて書きものを終え、羊皮紙をわきにどかすと、顔を上げた。

「久しぶりだね、アンナ」

「姐さんも。久しぶり」

『姐さん』と呼ぶのは、この女性に親しみと敬意を示すためだった。まわりに人がいないときには、仕事中にもそう呼んでいた。相手はそれを嫌がる様子もなく、むしろ喜び、二人は姉妹のように仲がよかった。

しかし、今二人の間にはいつもとちがう空気が漂っていた。アンナはそれを感じとり、不安を覚えた。

「あんた、最近景気いいみたいじゃないか」

「そうかな」

「そうさ。今回の仕事だって、また山向ここの領主様が相手なんだろう」

「ああ、まあね。でも、貴族にいがちな変人だし、あんまり気前も良くないんだよー姐さんの方はどうなんだい。ここの運営は変わりにない？」

「こっちかいー変わりあるね。厄介な事件が起きた」

パチパチと火の弾ける音が響く。アンナはつとめて平静を装いながら聞いた。

「厄介な事件って、何があったんだい？」

「うちの経営する酒場で賭博師がひとり、捕まったんだよ。イカサマをやらかした。今も牢にぶち込んでいる。酒場での賭博は当面禁止さ」

「……イカサマってどんな？」

館長は黙って、机の引き出しから何かを取り出した。

手のひらで包んだそれをぱっと机に転がした。カラカラと小気味よい音を立て、ほどなくぴたりと止まった。ダイスだった。3つある。それらが全て、一の目を上にして止まったのだ。

アンナは三つ目の竜に睨まれた気がして、胸から顎にかけてこわばるのを感じた。

「これは竜の骨を彫った賽だよ。『竜の目』っていうんだ。魔術の手練がなくとも、念じ方のコツをつかめば望んだ目が出せる」

館長は眼鏡ごしにまっすぐアンナを見つめる。彼女はそれを正面から見つめ返すことはできなかった。

「酒場の賭博はあんたが仕切ってたはずだね。魔術師であるあんたがこれをつかったイカサマに気づかないはずはないと思うんだが。そもそも、こんな珍しい品をあんな一介の賭博師がなぜ持ってるのかねえ」

アンナは俗に”魔術屋”などと呼ばれる商人のひとりだった。商品を鑑定するために魔術を修めている。

ここ数年、科学の台頭により魔術が衰退し、関連する書物や品物が多く市場に出回るようになった。まだそれらを欲する魔術師や需要を持つ好事家を探し出して売るのが魔術屋の主な仕事だ。

アンナはほかでもないこの館長に魔術の才を見いだされ、そこから彼女の商人としての地位があった。目の前にいる女性はアンナにとって恩人のはずだった。

だが今は、目を合わせることもできない。アンナは唇を噛み、俯いたままだった。館長はため息をついた。

「あんたは今、大きな仕事を抱えている。領主様に迷惑をかけちゃいけないから、この件を今日中にどうしようとは思わない。でもね、あんたがやったことは決して許されないよ。商会は科学を信望する組織だ。その膝下で、魔術の品を使ってイカサマをやらかしたってのはすごく体面が悪い。あんただけの問題じゃない。あたしやほかの魔術師連中だって、信用を落とすことになるんだよ。あんたのやったことはあたしらに対する裏切りだ」

しずかで落ちついているが、刺すような気迫のある声だった。アンナは身体の芯から震えが走るのを感じた。

「なぜこんなことをしたんだい」

頑として答える気はなかった。ここで何かいえば、ぼろが出てしまうかもしれない。そうすれば、今まで商館を欺いてきた苦勞が台無しになる。今回負っている仕事も、本来の意味がなくなるだろう。

張りつめるような沈黙の後、館長はふたたび口を開いた。

「もういい、行きな。明日は早いんだろう。領主様にはくれぐれも

失礼のないようにね……」

アンナは最後まで何も言わずに、席を立った。

館長はすでにダイスをしまって羊皮紙の書面に目を落とし、こちらを見てはいなかった。

早足で歩いて行き、扉に手をかける。

「商談が終わったら、聞きたいことが山ほどあるからねー必ず戻っておいで」

「……ああ、わかった」

静かに、だがたしかに答えて、アンナはゆっくりと扉を閉めた。

館の廊下を歩きながら、アンナは、胸の底があぶられるような焦りを感じていた。

あの賭博師、やり過ぎたのか。きっと竜の目に魅せられたのだろう。欲に憑かれて、無茶なイカサマをやらかしたのに違いない。

アンナは長く息を吐いた。

しかし、イカサマで稼いだ金の使い道を、あの賭博師に教えていないのは幸いだ。今回運んでいる売り荷を無事に届ければ、軍資は足りるだろう。

ついに計画を実行に移せるのだ。

ー必ず戻っておいで

館長のことを思うと、心が傷んだ。だがこれも目的のためだ。今さら後戻りはできない。

自分に言い聞かせていると、

「アンナさん」

声をかけられ、我に帰る。さっきの従者が廊下の向こうからかけてくる。

「どうしたんだい」

「あの、お連れの方が酒場で……」

「マークスが？」

宴の終わり

酒場の前では、ドアから漏れる光に照らされた数人の影が言い争いをしていた。

店主と、店に訪れた男たちだった。

「だから、この店で賭け事は禁止されてるんだよ」

「本当かあ？」

「じゃあ、なんで店の中があんなに盛り上がってるんだ」

男の一人が光の漏れる先を指差した。ちょうど店内から歓声のような、怒号のような、悲鳴のようなたくさんの声が聞こえてきた。

「ほら、あんなに賑わってるじゃないか」

「だから、賭け事はやってないよ。頼むから帰ってくれ。そんなにたくさん出せる酒はないんだ」

「まずい酒なんかいるか。賭け事をやらせろ」

「なんだと！ 下手に出てりゃ、この野郎」

アンナは光の当たるところまで歩み出た。

「ずいぶん賑やかじゃないか」

彼女に気付いた男たちは、争いをやめて黙りこんだ。

酒場の店内は混雑していた。一つの卓を中心に人だかりができている。

卓についた者たちは、自分の振ったダイスの目に一喜一憂して叫んでいた。それが観衆へ波のように伝わって、荒れ狂った海のような騒ぎを生んでいた。卓についている人数はぎゅうぎゅう詰めで10人。隣同士で肩をぶつけ合っている。そんな肩相撲に圧倒的な強さを発揮しているのは、農民や商人たちから頭一つ抜きんでた体格の男。

その男は、人ごみをかき分けてやっこの思いで卓の前まできたアンナに気づき、赤ら顔で手を振った。

「よう。アンナ」

彼女の存在に気づいた者たちは、次々に口をつぐんだ。沈黙が支配する。

マーカスは周りの様子に気づき、不思議そうに見まわした。

「どうしたおやじ。早くダイスをふんなよ」

おやじと呼ばれた商人はチラチラとアンナの顔をみると、ダイスを握ったまま、マーカスに首を振ってみせた。

マーカスは訝しげな顔をしたが、すぐ合点がいったようにうなずいた。

「なるほど、賭け事禁止の令ってやつだなあ」

マーカスはよろりと立ち上がった。間の抜けた手つきでアンナを指さす。

「いいかよく聞け。商会の手先めが。これはれっきとした遊戯だ。お前たちにどうこういわれる筋合いはない。俺たちはな、汗水たらして働いて、その日の残りの時間は酒を飲んで遊ぶ自由を得るんだ。せっかくの憩いの時間を、お前たちにでかい顔はさせないぞ」

商会の紋章を胸に掲げた男が、商会に対して挑戦的な弁をふるっている。異様な光景に人々が見入っていると、アンナは落ち着きはらって口を開いた。

「確かにあたしらは、決まりを守っている限り文句をつけようとは思わないーただ、その遊戯は領主令で禁止されてるんでねえ」
人々の間にどよめきが走った。

「渦潮と、それに類する遊戯は、ここ、ケストナル伯領内では禁じられている。その遊戯は陸でやると秩序を乱すからねえ。自分が当たったときの取り分を多く欲しいからって、どんどん人数を増やしたくなる。そうすると、一周するまでに出目を忘れたりとか、イカサマなんかをしやすくなる。混沌の渦がどんどん広がって人を飲みこんでいく。人数が限られてる船の上だからこそ楽しめるんだよ。その遊戯は」

アンナは腰に手をあてて、ぐらりと周囲を睨めまわした。

「どうするね、私はまだ、誰もダイスを振ったところを見てないよ」
次にマークスを見る。

「あんたがいま言ったことも、雇ってる身として大目に見てやる。
ーさあ、早くこの馬鹿げた騒ぎをおひらきにすることだね」

人々は我先にと扉へ押しかけ、あつという間に酒場から人がいなくなった。

残ったのはアンナとマークスと店主の男だった。マークスは座りなおし、無然とした顔で腕を組んでいた。アンナはそれを正面から睨みつける。

店主の男が卓にジャガイモの載った皿を置いた。

「あんたが注文したジャガイモのチーズかけだよ。すっかり冷めちまったがね…」

マークスは固くなったチーズがへばりついたジャガイモを一個つまみあげると、口に放りこんだ。

その間もアンナをにらむ。

「マークス、あんたもとっとと宿舎に戻ったらどうだい」

「うるせえ」

マークスはジャガイモを頬張ったまま、もごもごとぼやいた。

「これはただの遊戯じゃねえ。神事だ。マリス竜の伝承に沿った、格式あるもんだぞ。竜は富の象徴でもある。金銭が伴なうことこそ神聖なんだ。誰にも止める権利はないんだ。誰にもな……」

アンナはため息をついた。

「博打狂いめ……」

首を垂れて地面を睨んでから、やれやれと顔を上げる。そして、マークスの正面の席に座った。

「いいだろう。そんなに言うならあたしが付き合ってやる。ダイスをよこしな」

手のひらを差し出した。

「なんだ、博打は禁止じゃねえのか」

「だって、それは博打じゃないんだろう」

「でも、この遊戯も禁止だって……」

「うるせえな、つきあってやるってんだよ!」

悪態に気圧され、マークスは渋々、3つのダイスを差し出した。

アンナは受け取ると、感触を確かめるように手のひらで転がす。

「つきあってくれるのはいいが、いくらでやるんだ」

「5 g pだ」

「g p! ? しかも5!」

「怖いのかい?」

小馬鹿にしたような笑みを浮かべるアンナに、マークスは歯がみして見せる。

「やらないなんて言っていないだろう」

「そうこなくっちゃ」

アンナは、自分の手元を穴が空くほど見つめている男に視線をぶつける。

これが、この酒場でやる最後の博打になる。

相手が酔いどれの博打狂いでよかった。最後にふさわしい。恨みっこなしで、存分に振れる。アンナは、なんの細工も魔法も施されていないダイスを、パツと卓に放った。

悪夢、忘れたい過去

――おい、どうしたんだ。早く振れ。

マーカスは苛立たしげに、自分の正面に座っているマーカスを睨んだ。

正面のマーカスはダイスの感触を確かめるばかりで、いつまでも振ろうとしない。

――俺が二人いる。これは夢だ。

「早く振れ！」

マーカスがいらだって急かすと、正面に座っているマーカスの焦りと不安がじかに伝わってきた。

「早くしろ。時間がない！命に関わるんだ！」

マーカスが鬼気迫る表情で促した。正面のマーカスは恐怖に顔をゆがませながら、ダイスを振った。出目を見たときの絶望感が、マーカスから向かいのマーカスにありありと伝わった。

――ああ、こんなはずじゃないんだ！　こんなはずじゃ！

次の瞬間には、マーカスは戦場にいた。絶望感はそのままだが、もう一人のマーカスはいなくなって、代わりに見知った傭兵仲間の顔が並ぶ。その中の一人は怪我をしている。血で赤黒く染まった腹部をおさえ、口のはしから血の筋を垂らしている。弱々しい声で、かたわらに屈みこんだマーカスに助けを求めている。

「マーカス、おまえの力が必要なんだ！助けてくれ、おまえの力で……」

「無理だ。出ないんだよ。いい目が」

「ああ、頼む。俺は死にたくない……」

「無理なんだ。すまない。お前を助けられない」

「頼むよ……」

「無理だ」

「頼む……」

マーカスが重ねて無理だ、と言おうとすると、目の前に横たわっていた友人はいなくなった。

腹部に激痛が走った。

気づくと、自分は怪我した腹部をおさえて横たわっており、マーカスの顔が覗きこんでいた。

「お前のことは助けられない。すまない」

覗きこんでいるマーカスが悲壮な顔で言った。

「そんな……死にたくない……俺は死にたくない！」

マーカスは眠りから弾かれるように意識を覚醒させ、飛び起きた。息をはずませながら、首を巡らせる。

見なれない部屋のベッドに寝ていたようだ。窓から射す朝日が、簡素な室内を照らしている。

彼はしばらく逡巡し、記憶をとり戻した。ここは商館の宿舎にある一室だった。

マーカスはため息をつくと右手のひらを見た。

またあの夢だ。

もう二年も前の戦場での出来事だ。それをいまでも、ときおり夢に見る。

あれ以来、”あの力”は使っていないのに……。

マーカスは魅入られるように右手を凝視している自分に気づいて、ぶんぶんと頭を振った。

この手はダイスを振っていた方がお似合いだ。

ダイスときて、マーカスはハッとした。

そう言えば。

昨夜の勝負はどちらが勝ったのだろう。

マーカスは金袋を探しはじめ。ベッドの脇の小卓におかれているのを見つけると、それを取ってまさぐった。

なかには銀貨が5枚。5spが入っているだけだった。

村の連中を相手にした勝負には面白いほど勝って、その時点ではあわせて5 g pを稼いだはずだった。

昨夜、最後の勝負で賭けた金額5 g pがきっちりなくなっているということだ。

「俺は負けたのか……」

マークスは自分が敗北したときの状況をはっきり思い出せないまま、ぼんやりとつぶやいた。

「マークス！」

壁の向こうで張りのある女の声が聞こえた。

ドスドスと足音が近づいてきて、やがて扉が乱暴に開かれた。

「いつまで寝てる気だ！ もうここを発つよ」

扉の前に立っているのはアンナだった。新しいローブを纏い、前日より大きめの袋を背負っている。すでに旅の支度を済ませているようだった。

寝起きのマークスは、ぼさぼさになった金髪を掻いた。

旅立ち、急襲

宿舎から出てみると早朝で、日が出たばかりの頃合いだった。まだ湿った夜気をはらんでいる空気が朝日に当てられ、みずみずしく輝いている。

商館の敷地内は朝からあわたしかった。麻袋をかついでいる者、馬車につなげるために馬をひっぱっていく者、走りまわりながら帳簿をつける者などがいた。

「ぼーっとしてないで、とっとと出発するよ」

アンナはマークスを急かし、二人は納屋へ向かった。

そこではすでに、従者たちがラバを馬車につないで待っていた。

「もう荷は確認してある。乗りな」

「朝飯は？」

「荷台の上で食わせてやるさ」

アンナは自分の背負い袋を荷台に放り投げると、すばやく御者席に乗りこんだ。

マークスも、のそのそと荷台に登る。

「アンナ様」

アンナについている従者が見送りにあらわれた。馬車の傍らまで駆けてきて、不安そうな表情でアンナを見上げた。

「くれぐれもお気をつけください」

「ああ、行ってくるよ」

アンナは笑顔で応じた。心にもない自分の言葉に胸を刺されながら。

馬車は商館を出て、村の山脈方面に設けられたもうひとつの門へ向かった。

村を出るとき、門衛にいったん止められたが、彼らはアンナの顔を見ると態度を一変させ、丁重に馬車を送りだした。

怪訝な顔でふりかえるアンナに、マークスは愉快そうな笑みを向け

た。

「あいつら、酒場で遊戯に参加してた奴らだ。お前に昨夜のことをバラされるのが怖かったんだろうよ。こりゃあ幸先がいいぜ」

昇る朝日を右手に、馬車は街道を走る。

道は途中までまっすぐ山を登り、勾配が急になったあたりからジグザグと斜行していた。中腹には森が残っており、道はそこから木々に抱かれた闇にもぐっていた。

ラバたちはきつい坂をたしかな足どりでのぼっていく。

「こいつらは峠越えに慣れてるのさ。ラバの脚は馬より丈夫で、ロバより俊敏だからね」

アンナは得意げに言った。

馬車は昼ごろ、中腹の森にさしかかった。

年経た巨大な杉が拓かれた道の上にまで枝を伸ばしている。日の高い時間帯にもかかわらず、陽光がさえぎられた道はうす暗かった。

マーカスは首を巡らせる。胸のあたりがざわついて、妙な気分になったからだ。気配を感じる。

鳥か、獣か、あるいはまったく別のものか。いちおう、アンナにも警告しておこう。

そう思ってマーカスが口を開きかけた、そのときだった。

するどい爆音が森の静寂を切り裂いた。

「銃だ！ 伏せろ！」

アンナが鋭く叫んだ。

警告が遅れたことを後悔しながら、マーカスは荷台で腹ばいになった。今度は敵をさがすために首を巡らせる。

アンナは思いきり鞭をふるう。馬車のスピードがぐんぐん加速する。二発目の爆音がひびいた。馬車の通りすぎた幹に命中し、一瞬で穴が穿たれる。

間髪入れず、次々と発射音が響く。確実にこの馬車を狙っている。

一人ではない。

「マーカス！」

アンナが肩ごしに銃を投げてよこした。マーカスはそれを受けとった。

前方の路端から、男がふたり飛びだしてきた。目出し布をつけていて、素顔はわからない。ふたりとも手に銃を握っており、それをこちらに向けた。

マーカスも荷台で片膝をたててかまえた。

三丁の銃が火を噴きあう。

マーカスの撃った弾でひとりが倒れた。もうひとりも馬車にひかれるまえに、耐えきれなくなって脇の茂みへ飛びこんだ。

「森に入る！」

アンナはかすれた声で叫んだ。

馬車は鋭角の曲がり道に沿わず、まっすぐ森に飛びこんだ。さすがにバネのついた車輪でも岩や根にはじかれて、荷台が大きく揺れる。マーカスはなんとか片方の手で縁につかまり、もう片方の手で木箱をおさえた。

ラバたちは果敢に低木や草花を踏みつけて、森を駆ける。さいわい、彼らには弾が当たらなかったようだ。

やがて、馬車は岩や木が少ない平らな地形に出た。そのまま走っていると、両脇の地面がせり上がってくる。谷間にさしかかったようだ。

アンナはこの地形を把握していたのだろう。逃げ道があったのは幸いだった。

あのまま稲妻のように曲がりくねった道をもたもた蛇行していれば、蜂の巣にされていたかもしれない。

「これからどこへ向かうんだ？」

マーカスの問いには応えず、アンナは馬車をひたすら駆る。

ひょっとして、この道は当てずっぽうだったのか？

不安をおぼえて前方を見やる。

すると、景色がぼんやりと白んでいくことに気づいた。

霧だ。進むほどに濃くなっていく。谷間には濃霧が立ちこめているのだった。

「おい。どこに向かっているかわかっているのか」

彼女から返答はない。

もう一度呼びかけようとしたところで、馬車はとたんに速度を緩めはじめた。そして、ちょうど洞穴の穿たれた岩壁のまえで停まった。ここが目的地か。マーカスは霧で真っ白ににごった背後をふりかえった。たしかに、この場所なら簡単には見つかるまい。気配も感じられないところから察するに、追っ手もまいたようだ。洞穴に隠れるのか？

マーカスが向きなおって、そう訊こうとしたときだった。

ドサリ、と音をたてて、御者席から何かが落ちた。

そこには当然、人間が座っていたはずで、それが誰だかは考えるまでもなかった。マーカスはこのとき、やっと彼女の異変に気づいたのだった。

癒しと追憶

「おい、大丈夫か！」

彼女の弱々しいうめき声を聞きながら、マーカスは荷台から飛びおりた。ラバたちは不安そうに長い顔をキョロキョロさせている。彼女に駆けよったマーカスは、息を呑んだ。

アンナは苦悶の表情で、硬い地面に横たわっていた。自分でおさええている脇腹には大きく血が滲んでいる。息も絶え絶えで、いつ死んでもおかしくない状態だった。

撃たれたのか。マーカスは目まいをおぼえてよろめいた。昨夜見た夢と、二年前の記憶と、目の前の光景とが重なったからだ。だが、彼は途中で踏みとどまって頭をふった。

なんとかしなければ。こんなところで立ち往生なんて、冗談じゃない。マーカスはアンナを抱きあげると、洞窟のなかへ運んだ。

彼女は、うつろな目でマーカスを見あげる。

「ここは洞窟かい……？」

「ああ」

「積み荷は……？」

「なんともないみたいだ」

「そうか、よかった……」

マーカスは、弱々しい安堵の息を吐いてぐったりとする彼女を、そっと洞窟のつめたい地面に横たえさせた。その顔色は、すでに血の気をうしなって真っ青だった。運んできたマーカスの手にはべとりと血がついている。

彼は血塗られた右手をまじまじと見た。もう過去の感傷に浸って、ためらっている猶予はなかった。この顔色をみればそう思わざるを得なかった。

「マーカス、あたしのことはいいから、山を降りて、商館にこのことを知らせてくれ。積み荷を届けなきゃ……」

「いや」

マーカスは決然とした表情で首を振った。

「俺にはひとりで無事に山を降りられる自信がない。それより、おまえを置いていかずに、あの荷物も届けられる最高の方法がある」

「なんだって……？」

マーカスは黙って、彼女の血に染まったローブを引き裂いた。

「っ……！」

アンナは驚愕の表情を浮かべる。

マーカスは注意ぶかく傷口を観察した。正面から腹部の端を撃たれている。おそらく、ふたりの刺客と対峙したときに負ったものだろう。出血はひどいが、弾は貫通しているようだった。

「これなら、すぐ治せるな……」

独りごちるマーカスに、アンナは戸惑いの目を向ける。

「治すだって……？」

「ああ、それもすぐにだ」

「どうやって……？」

「魔術さ」

それだけ言うともーカスは、傷口が上にくるようにアンナの身体を横転させた。そして、傷口にそっと右手をかざした。

「動くなよ？」

一言のこして、目を閉じた。アンナの疑問の声にも耳を貸さず、マーカスは集中した。しばらくすると、右手が青く光り出した。

アンナは青い光に照らされて、息を呑んだ。見るとマーカスは、集中を絶やすまいとしているのか硬い表情だった。この青い光は、まちがいに治癒の魔力だ。魔術師のアンナにはすぐにわかった。

「なんで、あんた、こんな力があることを隠してたんだい」

「力をつかえる日とつかえない日があるから、変に頼りにされたら困ると思って、言わなかったんだよ」

そう言うマーカスの手からは、やわらかい青色の光がよどみなくほとばしっている。アンナは合点した。儀式をとみなわない、天然の

魔術がつかえる能力者なのだろう。古い書物で読んだことがあるのを、彼女は思いだした。稀有な存在で、記録には数えるほどしか登場していない。なんという巡り合わせだろう。喜びよりも、驚きが勝る気持ちだった。

「よかった、今日は調子がいいぜ。命びろいしたな。昨晚の勝負で運をひきよせやがったんだろうが」

アンナは、こんな状態でも自然と口元がほころぶのを感じた。

「この博打バカめ」

「へへ」

痛みはだんだんと薄れ、やわらかい温もりが、脇腹からじんわりと広がっていくのを感じる。暗くしめった石の地面に寝かされているのに、うららかな陽気の降る春の野に横たわっているような、不思議な気分だった。恐怖や緊張が溶け、一気にまぶたが重くなっている。

アンナはその感覚に身を任せることにした。だんだんと意識が沈んでいくーと、

「アンナ、頼む、起きててくれ」

呼ばれて、引き戻された。みると、こわばった表情のマークスが覗きこんでいた。額に汗が浮かんでいる。

「どうしたんだい」

「怖いんだよ。やっぱり上手いかわなくて、また死なせちゃうんじゃないかと……」

「また？ 死なせたこと、あるのかい……」

「ああ……いいやつだった。この能力のことを知ってて、誰にも言わないでいてくれたのに……」

アンナはしばらくマークスの顔を見つめていたが、やがて、掠れた声を押しだした。

「悪かったね」

「何がだ」

「雇うとき、あんたのこと、ばかにした……」

マーカスは首を振った。

「いや、悔しいがおまえの言う通りだった。現に、いまはこの体たらくさ。俺の仕事なんざこんなもんだ」

「そんなことない。充分働いてるよ。私がこのまま死んだとしても、あんたへの評価は変わらないさ」

「おいやめろ。生き延びたきや、未練はなるべく残しておけよ」

「ふふふ……」

こうして、二人はいろいろなことを話した。

最初は本当に間を持たせるためのくだらない冗談や世間話をしていった。やがて、どちらから切り出したのかわからないが、自分に直接関わることも語り合った。この話題では、バルハリクのことが共通してでてきた。アンナは孤児院にいた頃の話をするとき、懐かしそうな遠い目をしていた。

マーカスはその目に誘われるように、自分の幼少時代の話やリイズ公国で傭兵として働いていたときの話をした。

これだけ自分の生い立ちや仕事のことを他人に話すのは何年ぶりだろうか。

お互い心身ともに疲弊していたせいか、自分のことを語りあい、自身の存在を確かめあいたかったのかもしれない。言葉を交わすうちに、だんだんと夜は更けていった――。

目覚めと秘密の入り口

小鳥たちのさえずりを聴いて、アンナはうつすらと目を開けた。

わき腹の傷を上にして寝ていたので、まず向かいあって寝ているマーカスの顔が目に入った。一晩中、治癒の魔力を使っていたのだろう。彼の寝顔は精気を消耗して、青白かった。

自分にだけ毛布がかけられ、そのしたで、脇腹に触れている大きな手の感触があった。毛布を持ち上げてみると、出血のあとすらなかった。そつとマーカスの手をのけ、毛布からぬけだして脇腹を撫でまわしてみる。

そこには最初から傷などなかったかのようだ。

アンナはしずかな衝撃に襲われながら、マーカスに毛布をかけてやった。

背負い袋から予備のロープをひっぱり出すと、頭からかぶり、そろそろ洞窟の入口まで歩いていった。

外には濃い霧が立ちこめ、かすかな風に吹かれてあるかなしかの流れをつくっていた。

洞窟のそばにはちゃんと馬車が停まっていた。草を食んでいたラバたちはアンナを見ると、うれしそうに鳴いた。彼女は忍び足で駆け寄ると、ラバたちの長い顔を撫でた。

「昨日はありがとう。あんたたちががんばったよ」

馬車を洞窟へみちびきながら、アンナは白濁した風景を見やる。

日が高くなるまで、この霧は去らないだろう。充分な時間を稼げる。馬車とともに洞窟の奥にもどると、アンナは髪を結いなおし、銃の手入れをはじめた。

そのあいだマーカスは身じろぎして、低く唸った。うなされているのだろうか。

（少しでも長く寝かせてやろう）

青白い寝顔を見つめながらアンナは思った。

時間をかけて念入りの銃の手入れをすませ、焚き火をつけると、彼女はマーカスを起こすことにした。

肩を揺ると、彼は弾かれたように上体を起こした。目まぐるしく周囲を見回し、アンナの顔を見て、その目にやっと理解の色が浮かぶ。深く息をついた。

「あんた、うなされてみたいだけど……」

「……ダイスで負ける夢を見た。お前とやって、負け続けて、すっからかんになった。そしたら、なぜだか知らんが

3つのダイスが3つ目の竜になって、俺を食おうとしやがったんだ……」

アンナはおもわず吹き出してしまった。

焚き火をかこんだ2人は、干し肉と干し麦を鍋で煮込んで粥にしたものを食べた。

「傷はもう大丈夫か」

「大丈夫もなにも、跡形もなくなっちゃったよ」

「そうか、よかった」

「それより、いまはあんたのほう心配だよ。ずいぶん疲れさせたのに、ひもじい食事ですまないね」

マーカスは笑みを返す。

「明日は都市に着くんだろう。そしたら美味しいものがたらふく食える。今から楽しみだよ」

2人は笑いあった。

笑いの波は徐々にひき、やがてマーカスが真剣な顔できりだした。

「これから、どうするんだ？」

「この先へ進む」

アンナは洞窟の奥に横たわる闇を顎で示した。

「奥がどうなってるか知ってるのか」

「もちろん。だからこの洞窟へ逃げてきたのさ」

食事を終えると、マーカスはランタンに火を移し、念入りに野営の

あとを消した。

アンナはラバたちの轡にロープをつけると、二頭まとめて繋ぎ、馬車ごと牽いてきた。

マーカスは轡のロープを受けとり、アンナはランタンを手にして先頭に立った。

「いくか」

2人はうなずきあった。

ランタンで闇を照らしながら、ゆっくりと洞内を進む。

しばらく進んでいくと、マーカスは岩壁に彫り込まれた文様に気づいた。うねったりねじれたりしている無数の線が岩壁を縦横に走っている。

「これは……」

アンナが肩越しに振り向く。

「古代文字さ」

「古代文字？」

そういわれれば、文字のようにも見える。

「おまえが彫ったのか？」

「違うよ」

アンナは笑った。

「もともと彫ってあったんだ。それを私が見つけたのさ。二年かけて解読して、今じゃ利用させてもらってる」

解読できるだけでもすごいと思ったが、マーカスはこの文字がどう利用されているのが気になった。

「利用するって、いったい何をどうするんだ？」

アンナは微笑み、岩壁に手のひらをつけた。すると、刻まれた文字列が緑色の光を放ち、波紋のようにひろがった。

光は四角い枠をつくりだした。枠にかこわれた部分の岩壁がくぐもった音をたてて沈み、横に退いた。

高さ10ft、幅15ftはある穴が出現した。アンナはランタンを掲げて踏み入った。マーカスと馬車もあとに続いた。

進む道と縁（えにし）

トンネルは、入口の穴と同程度の大きさで奥まで続いていた。あいかわらず、岩壁を古代文字が縦横に走っている。進む先は途中で曲がりくねり、どこまで伸びているかわからなかった。

「どこに続いているんだ？」

「山脈の向こうがわさ。結構入り組むから、馬車が引っかからないように気をつけておくれ」

「この抜け穴は、よく使うのか」

アンナは首を振った。

「まだいろいろ調べている最中だし、こんな風に逃げ道として使うのは、はじめてだよ」

「普段、野盗は出ないのか？」

「野盗自体はときどき出るよ。珍しいことじゃない。ただ……」

アンナは宙を睨む。

「あれはただの野盗とはおもえないね」

「どういうことだ」

「積み荷や金品が目的の襲撃なら、あれだけの銃を用いて、あんな回りくどい方法をとるだろうか」

マーカスは襲われたときの状況を記憶から思い描いた。

道を全力失踪する馬車を、わきの森に隠れた何人もが、次々に銃で撃ってきた。あれだけ大がかりに仕掛けておいて、積み荷の確保も考えないようなやり口は、たしかにおかしい。野盗をするようなケチな輩のやることではない。

「じゃあ、いったいどのどいつが、あんなまねをしゃがったんだ」

「そうだね、考えられる可能性としてはー」

アンナはそこで、我に返ったように言葉を切った。おもわず正面に向きなおってマーカスから顔を背ける。

「どうした？ 可能性がなんだって？」

「なんでもないよ」

「なんでもないことはないだろう」

「早合点かもしれないし、もう犯人なんか誰でもいい」

怪訝そうな顔をするマーカスに、アンナはぎこちない笑みでふりかえった。

「あたしらはもうすぐ買い手のいる王都ケストナーに着くんだ。

相手がどんなやつだろうと、銃兵の護っている街中に入れば安全さ。仕事を終えてパアツと盛り上がる時のことを考えよう」

マーカスは「それもそうだな」と曖昧な表情を浮かべながら頷いた。アンナは犯人の心当たりがあったが、あえてマーカスには言わなかった。彼には、そういう特別な危険があることを事前にわからせるだけで充分だと考えた。

これ以上、巻きこみたくなかったのだ。

アンナは内心で苦笑する。命の恩人とはいえ、雇って二、三日も経っていない傭兵に、これほど情が移ってしまうとは。その傭兵を自分に紹介してきたバルハリクをすこし恨んだ。

あの男は一流の船乗りであると同時に、天性の商売人だった。人の間に縁をつくり出す天才だ。アンナが商人としての地位を確立できたのも、もとはといえば、彼があゝの商館に自分を紹介してくれたからだ。

――いまでは、その縁をアンナ自身の手で壊してしまったが。

アンナは、肩ごしにそつとマーカスの顔を盗み見た。陽気な傭兵は、本当にこのあとの宴について考えているかのように、たのしげな表情を浮かべていた。

彼とも、さっさと縁を切らなければならない。それが最良の選択だと、アンナは自分に言い聞かせた。

そうして彼女は正面へ向きなおり、目のまえに伸びている入り組んだ闇を見すえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340y/>

とある傭兵と商人の顛末

2012年1月14日17時56分発行